

に考へるかは別として、これが漢の頃の織物なるを認むるにおいては異論はあるまい。

この外刺しう模様の上から、系統素性を判然と定めかねるとせられるものも、二三記されて居る。今はそれ等についての一々の紹介は省略する。



さてこの發掘は、古い時代に外蒙古に據つた民族が、かゝる壯大なふん墓を營み、西方南方種々の系統に出た美術品を愛用した事實を知り得たゞけでも、古來支那の史家によつて、概括的には獸類の如き存在を書き傳へられ、一般にもそれに據つてともすれば彼等が牧する家畜とほゞ同様の生活を營むに過ぎなかつたが如く考へられ易い彼等を解するに極めて興味もあり重要である結果を得たものといはねばならぬ。この結果の上に立つて先づ考究されなければならぬことは、このふん墓の時代とか、これを營んだ民族とか、更にかゝる物品をかゝる地方にもたらずに至つた事情とかの類である。發掘に従事したコズロフ氏等は、何を據にしたかは知らないが、この墓を漢代のものとして認めて居ることはイエッツ氏も記して居る通りである。然し西歐の學者の間には、左程古いところまでさかのぼるものでなく、もつと後代に屬すると見るものゝ多かつたことは、二三氏からの私信にも見えた。支那においても同様で、始めこの消息の傳へられた時に、ほとんどたれもが漢代のものとは認めなかつたことである。然るにこれがコ氏等の考へ通り、漢頃のものであるべきことは、當時滯歐中の我が梅原末治君によつて指示されたもので、イ氏論文にもその見解を付記して居る。梅原君の見解の根據になつたものは、氏自からが熟知せる朝鮮における樂浪郡の遺跡から出た兩漢時代のしつ器、ことにその兩側に手の付いた杯であつて、形においても模様において